

メバルの種苗生産について

長崎県総合水産試験場
種苗技術開発センター 種苗量産科

メバルはカサゴと同じ卵胎生(図1)で、カサゴに近い仲間です。長崎県沿岸では12月下旬から1月中旬にかけて、産仔します。魚礁等に定着しやすい性質があり、放流用種苗として有望です。また、最近では養殖用種苗としても期待されています。

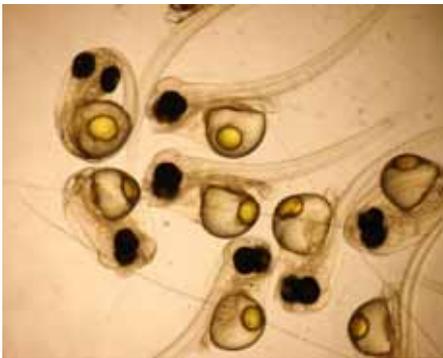


図1 卵巣の中で発生中のメバル

こうしたメバルの可能性を踏まえ、平成14年度から長崎県総合水産試験場では、すでに実績のある「カサゴ種苗生産技術」をモデルにして、メバルの種苗生産に着手しましたので、メバルの種苗生産の現況についてお知らせします。

メバルの種苗生産は基本的にはカサゴの種苗生産と同じです。しかし、次の2点は大きく異なります。

まず、親魚についてカサゴは12月から3月までの間、数回、産仔します。ところが、メバルは1回です。しかも、12月下旬から1月中旬までの極めて限られた期間での産仔です。親についてはカサゴより周到な準備が必要でした。

次に、メバルは全長3cmに成長するまで配合飼料をほとんど食べません。そのため、全長3cmなるまではアルテミア等の活きた餌を与え続けなければなりません。しかも成長するに従い、大きな餌を好み、大型生物飼料を給餌すると成長もはやくなります。平成14年度はアルテミアを1~2週間、培養して大きくして与えて良い結果が

得られました。

以上のようにカサゴの種苗生産とは異なる点もありましたが、平成15年3月には全長3cmの稚魚を2万6千尾生産することができました(図2)。生産した稚魚は放流試験や養殖試験用として使用しています。



図2 生産したメバル稚魚 全長3cm(60日目)

平成14年度の種苗生産結果から、今後安定して生産するために必要な解決すべき課題も見えてきました。

まずは、親魚養成技術の確立です。大型の天然の親は入手が困難で、入手した小型の親(体重約90g)から生まれた数は平均で5千尾~1万尾でした。これに対し、1年間養成した親魚(体重約170g)から採取できたふ化仔魚は3万尾以上でした。メバルの量産体制をつくるためには養成親魚の育成が必須の要件です。

また、長期間活きた餌が必要になりますので、大型生物飼料を量産する技術をつくるのが大切です。種苗生産に使用されている生物飼料の一つであるアルテミアは様々な方法で培養できますが、当水試では植物プランクトンのテトラセルミスと市販のパン酵母とで培養しています。2週間近く培養すれば体長約1cmの成体になります。今後、安定して大量に培養する技術を確立しなければなりません。

以上の2点を解決すれば、メバルの種苗生産技

術も実用レベルに達すると考えています。

最後に、メバルは当水試で開発中のマハタ、オニオコゼ、アカアマダイ等に比べ地味な存在です。しかし、メバルは共食いを全くしない魚種で、群れて泳ぐ性質が強いうえ、飼育の仕方を工夫すれば成長も改善できます。地域によっては重要な漁獲資源にもなっています。活用の仕方次第では栽培対象種にも養殖対象種にもなりますので、主役の魚になれなくとも、名脇役として活用の場を広げていきたいと考えています。

(科長 安元 進)